

国鉄問題が終ったのではない 国鉄をめぐる闘いはこれからだ!

日刊 動労千葉

87. 3. 4
No. 2492

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一八(動力車会館)
(鉄電)二九三五、六(公衆)〇四七二(22)七二〇七

2・28国鉄労働者全国交流集会 基調報告

一九八五年七月、再建監理委員会の最終答申が出されて以降、動労革マルの転向、社共一総評、国労指導部の屈服の中で百人の労働者を殺し、国鉄労働運動を解体しようとしたが粉碎され、一企業一組合も吹き飛んだ。敵は敗北感にうちひしがれている。今こそ動労総連合・国労共闘の旗のもとに結集し、中曽根・杉浦・革マル松崎を打倒せよ。



基調報告する布施書記長

差別・選別された 全国の仲間を奪い返せ

今日この会場に、これだけ多くの仲間が結集しているという事について、この間の攻撃を思い出すと感無量のものがある。

敵は、今日ここに結集しているわれわれを国鉄攻撃の過程で壊滅しようとしたが、われわれは逆に粉碎し、第一波ストの前よりはるかに強固な部隊として今日ここに登場しているという事について確認したい。

二月十六日の選別は、不当なものだ。この自身が、まさに不当労働行為であり、レッドパージであることが誰にもわかる形で出された。これは、組合差別であり、明確な動労千葉、国労つぶしのためのパージである。

この選別をもって国鉄問題が終ったのではなく、国鉄をめぐる闘いはこれからだということであり、こういう攻撃をこれからの闘いで粉碎し、動労千葉の十二名、全国百名、北海道・九州で九千とも言われる仲間を奪いかえす。今日の集会は、その決意を固めるものでなければならぬ。

中曽根の敗北感と松崎の犯罪性

今、中曽根や杉浦は勝利感を持っているのか。

十六日以降のマスコミ報道から見える姿は、国鉄労働運動をつぶせなかった、一企業一組合が吹き飛んだ、という敗北感にうちひしがれ、さらに、経済危機、売上税問題で中曽根は吹き飛ばうとしている。

今、国鉄官僚は「国鉄改革で良い事はなかった」とまで言っている。革マル・松崎、鉄労・志摩は、勝利したと思っているが、決してそうではない。自分だけ助かるために、定員を割り込んでも分割・民営化に反対した者は採用するなど言っている。これは犯罪だ。

「労働者の首を切れ」と資本家に願う労働組合がどこにあるか。こんな連中を許すことはできない。高崎では、動労組合員に「第一希望東日本、第二希望貨物会社と書け」と指導したが、革マルの役員、活動家は東日本だけしか書かず、結局、革マルだけが東日本、組合員は貨物会社という結果になり、怒りが渦まいている。これが動労革マルのやり方だ。フタを開けたら役員だけ逃げている。こんな連中を許せるか。動労革マル・鉄労・鉄道労連を解体一掃せよ。

さらに、ここまでの過程で、なんの指導も闘争も提起しなかった社共、総評、国労指導部の責任は等しく問われなければならない。

「差別」を叫ぶ 鉄道労連を解体せよ

敵は三月で人活を廃止すると言っているがベテランだ。新たに本務と余剰を区別しようとする差別・選別だ。動労革マル・鉄労は「配属で区別しろ」と中曽根・杉浦に泣きついている。これを阻止する闘いに決起しなければならない。

鉄道労連を解体・一掃し、動労総連合、国労共闘への労働者の結集をかちとろう。